余は昔し小兒視した吉野を今も固より小兒視して居る。而も今目の前に其姿を見ると何となく情けなく腹立たしい。昔しは彼の小兒らしき女らしき擧動は殆んど齒牙にかくるに足らぬものとしてゐた。今は一々侮蔑の眼を以て其の言行を見る。

何も此間の消息を知らぬ杉本は、

「幕内しらべが始まつたから鏡の間に行つて見やう」

と余の袂を引いた。鏡の間の大きな鏡の前には、富樫が體をのして威儀を正して居る。後ろには脇師の家元や弟子が立つて衣紋を直ほし袖を入れて居る。幕内しらべは程なくすんだ。笛方から立つて順に揚幕の左りを少しあけて其處から行儀正しく一間餘の間隔を置いて出て行く。何となくあたりが粛然とする。

余と杉本とはすぐ揚幕の横の小窓の所に邪魔にならぬやうに突立て見て居る。囃子方が出てしまふと富樫が揚幕の前に來て立つ。弟子の二人は揚幕に附いて居る竹の棒を持つて待つて居る。

「座着きましたか」

と富樫は揚幕から覗いて居つた家元に聞いた。家元は「よし」といひ乍ら急に身を横に避けた。同時に、

「お幕」

といふ莊重の聲が富樫の口から洩れると、サッと竹の棒は上に突上げられて揚幕は上つた。富樫の顏はあらたまつた。豁と眼を見開いて堅く口を結んだ彼は石の如く腰を極めてから左の足を一歩運び出した。次に右の足を運んだ。徐々として橋掛りにかゝつた。見處に在る千餘の人の視線は此時此富樫一人に集まつてゐる筈だ。杉本は左程にも感じぬらしい餘所見をしてゐる。余は堅唾を嚥んで見た。

富樫が橋がゝりにかゝつて次で狂言方の太刀持が出ると揚幕が下りた。今迄水を打つたやうに靜まりかへつてゐた鏡の間は又騷然としだした。仕手連れが堤を切つたやうに此にあふれ込んで來た。其中に子方の義經も居た。彼の大きな

鏡の前にはもう辨慶が腰を掛けて端然と自分の影と睨みつくらをして居る。物着せが袖を入れて居る。辨慶は物着せの一人に何かいふ。物着せは兜巾に手をかけて曲りを直ほす。仕手連れ仲間は珠數を口にくはへて互ひに袖を入れ合つて居る。

舞臺では脇の謠が始まつた。

「これは加賀の國安宅の港に、富樫の何某にて候」

名乘りが濟むと囃子方が次第を打ち出した。仕手は鏡の前を離れて揚幕の處に來た。今迄揚幕の前を往來してゐた仕手連は義經だけを殘して皆後ろの方に片寄る。其中にチラと吉野の顏が見える。富樫の「お幕」といふ莊重の聲で洗禮されたやうな余の心がまた亂れかゝらうとする。而も眼の前には辨慶が突立つて居る。流石に仕手には又仕手だけの位がある。弟子が一人來て足袋の上ばきを取る。仕手は揚幕の方を向いたまゝ腰に力を入れてぐつと體を極める。裝束がどこかできい〳〵といふ音を發する。大口のひだは強く左右にのびてすこしふるへて居る。舞臺ではだん〳〵次第を打ち進んで來る。物着せの二人は揚幕の竹を握つて居る。仕手連れはと見ると一番初めの一人が一間許り仕手を離れて、それから順にあとに跟いて並んで居る。あとになる程密集して居る。終りの三四人は並ぶ場處が無いので、亂雜に突立つて順番の來るのを待つて居る。吉野の顏は其の亂雜に突立つてゐる中にあつて余の方を見てゐる。不愉快な感じが心頭に閃めく。此瞬間、

「お幕」

といふ聲が耳元に聞こえた。余は雷に打たれたやうに覺えた。揚幕はさつと上つた。子方は無造作にする〳〵と橋がゝりに出た。さて其あとに突立つてゐる仕手はあまり大きい體格でも無いのが此時大男の辨慶になつてゐるのには愕いた。脇の運びとは違つて五六步力を籠めて稍斜めにする〳〵〳〵と橋がゝりに出た。其の早い運びに力の籠つてゐた事は其板間をする度に足袋の底に火の出ぬのを不思議に思ふ位であつた。小窓から急いで簾越しに見ると、仕手は其五

六歩の處に前に引きつけられる强大な力を金剛力で引き留めた如く突立つて、右の手を少し廣げ、肩に力を籠めて双方の踵を上げて體を上に伸し、再び其力をもとに戻してずしりと體を下し、それから普通の運びに戻つて橋がゝりを進んで行つた。揚幕は尙上つたまゝで居る。第一番の仕手連は此時さきに仕手の立つて居た處に立つて、ぐつと體をきめて左りの足から運び出す。赤い顔が少し靑みを帶びてゐる。仕手とは一間半も間隔があらう。第二番の仕手連があとから進み出て又さきの處に立つて、第一の仕手連と一間程の間隔が出來たと思ふ頃、これも體を極めて運び出す。こけた頰が一層引きしまつて見える。第三の仕手連が突立つ。前と同じ間隔を取つて運び出す。小さい眼に異様の光りが見える。第四の仕手連が立つ。第五の仕手連が立つ。第六、第七と進む。さきには只だ有象無象の仕手連と許り見たのが、こゝに突立つてからはいづれも堂々たる武夫と見える。たゞの山伏で無いやうに見える。一人は一人と異つた顔である、而も一々精神が吹き込まるゝに至つては變る處が無い。此橋がゝりと

鏡の間との接續點、其の板間の上には何の印しも無い。只足ずれのあとが少し白くなつてゐる許りだ。去かも此處は藝術の爲めには靈地である。こゝに立つと同時に藝術の神は何人の身の上にも乘り移るのである。崇高な情に打れる。

「オヤ〳〵、橋本といふ男はいつでも足を間違へる男だ、又左りで留つた」と小窓から覗いてゐた杉本は小さい聲でつぶやいた。仕手を始め仕手連はだんだん舞臺に並んでゐるのであらう。足を間違へるといふやうな左様な些細な專門的な事は余に取つて問題にならん。只感心して第八、第九と厭く事無しに仕手連を數へて居た。第十番目に其處に突立つたものは吉野であつた。

「宮内の鼓はけふはどうしたものかならんやうですね」

と杉本は傍の人に話して居る。

吉野は突立つて居る。今迄おど〳〵した眼で只余の視線を避けることのみをつとめてゐた彼は今堂々と余の前に突立つて居る。彼の目は去かと正面を切つて居る。蒼白な顔には光りがある。全身に氣力が充ちて居る。彼は仕手連の、而

も仕手連中の最端役である。彼はさきから衣裳はつけてゐた。しかも余の眼中に山伏としての彼は無かつた。一吉野なる柔弱漢として見て居つたに過ぎなかつた。併し今余の前に突立つてゐる彼は立派なる山伏である。此の安宅一番のお能舞臺を双肩に荷つて立つ立派なお能役者の一人である。他をして一指をも觸るゝことを許さぬ。彼の眼中にはお能舞臺の外何者も無い。こゝに突立つと同時におど〳〵したる戀の奴の心は消え去つて痕をも留めぬ。余は仕手を始め第九迄の仕手連を迎へたと同じ心を以て此の第十の仕手連をも迎へた。彼は同じく一間餘りの間隔を取つて左りの足を運び始めた。珠數を持つ手には微動が見えた。併し其の微動は武士の馬に跨がつて戰場に向ふ時の武者顫ひを連想せしめる。

吉野は仕手連の最後であつた。吉野が橋がゝりにかゝると其あとから笈を負うて金剛杖をついた狂言方が出る。長く揚げられてゐた揚幕は漸く下りた。物着せの二人は其儘ツイと立つて樂屋にかへつた。其内の一人は懐にほり込んで

置いた眼鏡を取り出してかけ乍ら這入つた。其他の人々も多く樂屋へ這入つた。鏡の間には我等二人の外二三人を止むる許りで、大水の引いたあとの樣に寂然となつた。其も杉本を始め他の二三の人は皆小窓から舞臺や見處を見て居る。余は氣がつかなかつたが此仕手連の幕離れを最後まで熱心に見てゐたものは余一人であつたらしい。余はさきに樂屋は空想と現實の中間に在るといつた。しかも今眼のあたり空想界と現實界との繼ぎ目を見た。此繼ぎ目に立つた吉野は最早我戀の仇では無かつた。余は吉野に對する此淸い一瞬間の記憶を長く〳〵失ふまいと思うた。杉本はまだ小窓から覗きながら傍の人と何か話して居る。舞臺では、

「旅の衣は篠掛けの〳〵露けき袖やしぼるらん」

といふ次第の謠がはじまつて居る。其の中には吉野の聲も交つて居るのであらう。併し其の中に吉野の聲の交つて居るといふ考はもう強く余の心を牽かなかつた。それはどういふわけだか自分にもわからぬ。恐く余が生涯のうち吉野に對

する快感はさきの數分時以外いづれの時にも起るまい。たとへ起る事があるにしても決して其の時に勝る時があらうとは覺えぬ。余は斯く考へながら彼の白く足ずれのした板間を見た。

余は杉本に、

「あの仕手連の一番仕舞の男はいつ頃から能に出るやうになつたのか」

と聞いて見た。杉本は

「知らん。此頃の事だらう」

といつた。鏡の間の入口では物着せが次の石橋に用ゐる紅白の大きな牡丹の花の造りものを臺の四隅にさしてゐた。樂屋に歸つて見ると仕手方の座はガランとしてゐて脇座に坐つてゐる家元は、これも石橋に用ゐるのであらう、角帽子を行李から出してゐた。

勝敗

妻が來て、お父樣が勝雄をつかまへて頻りに戯談をいつてゐらつしやいます、けふは御氣分がよいやうですけれどあまりお口をお利きなさると惡くは無いでせうかといふ。全體どんな事をいつて相手にしてゐらつしやるのだと聞くと、何でも初めの間は、おぢいさんの額に飛出たものがあるのは何だい、とか何とか聞いてゐたのです。するとお父樣はお額をお撫でなさり乍ら、これかい、これはお睾丸を嚥み込んだものだから爰が飛出たのだとおつしやつたのです。勝雄は初めの間は一寸不思議さうな顏をして、お父樣のお顏を見てゐましたが、急に、馬鹿言つてらア、お睾丸が嚥み込めるものかい、あんなうそ言つてらア、と急に霜が溶け初めていつもの惡態をつきそめたのです。初めお父樣がけふは氣分がよいから勝雄の寐床をおれの寐床の傍に敷けとおつしやつたものですか

ら、其通り致しまして、おぢい樣のお傍では大人しくしてゐなくつちやゐなりませぬぞ。其代りお前の好きな半紙をあげるから字でも書いてお遊びなさいといつて布團の上に新聞紙を置いて其上へ硯と紙を出してやつたのです。勝雄は大喜びで、東京の姉に手紙を出すとかいつていつもの樣に熱心に書いてゐましたの。おぢいさんは御機嫌よくぢつと見てゐらつしやいますから成程御退屈まぎれにはお傍へ寢かして置く方がよかつたと思つて居りました。ところが暫くしてもう其手紙も厭やになつて大きな欠びを二つ許りして横に臥せりましたので、おぢいさんの方から、勝雄もうお腹具合はいゝかい、柿を澤山食べてはならぬぞと、おつじやつたのです。食つたつていゝやい、とか何とかいつもの調子でいつてくれては困ると心配して見て居りますと、幸にあゝと素直な返辭をして大人しくして居りますから安心して、本當におぢい樣のおつしやる通り柿を澤山たべるとすぐ昨日のやうにお腹がいたみ出しますよ、これから氣をつけぬといけませぬぞと申しますと、私のいふ事は耳にも入れずぢろ〳〵おぢい樣

のお顏を見て居ると思ひましたら、さつき申上げますやうな事を申したのです。

さあ霜が溶け初めるともう始末におへなくなりまして、誰彼の見さかひが無いものですから、おぢい樣に散々惡まれ口を利きますの。やれおぢいさんのお顏は長いの、お色が黑いの、おぢいさんも海水浴をなすつたかの、海水浴をなさらぬのにどうしてお色が黑いかの、東京の姉さんも色が黑いが天長節には白粉をつけるから白くなるの、おぢいさんも白粉をおつけなすつたら善からうの、止め度もなく喋るのでせう、ハッ〳〵思ひながら聞いて居りますと、おぢい樣は又大變お氣に召して、一々其に御返答をなすつて、顏が長くなつたのは、お前は知るまいが昔は男でも髷を結つてゐたものだが或時おぢいさんの髷が裏の棗の木の枝にひつかゝつた、其時分おぢいさんは若くつて元氣であつて勝雄のやうな弱蟲では無かつたから力任せにひつぱつた、お床の柱位の棗の枝がポキリと折れたが其はづみにおぢいさんの顏も長くなつたんだとか、色も大變白

かつたのが子供の時分お草紙の上に居眠りをしたものだから其から黒くなつたんだとかそれでも男の子のお睾丸を食べるともとの通り色が白くなるといふので、いつか一つお睾丸を食べた、ところが其が間違つて女の子のお睾丸であつたものだから額にこんな飛び出たものが出來たとか、勝雄の睾丸を食べたらきつと白くなるから一つ食べて見やうかなどゝおつしやる。勝雄は釜圖に乘つて、おぢいさんの馬鹿野郎はよく喋るナア。フワ〳〵いつてものいひがわからねえや。一番角力を取らうかい、おぢいさん位片手で使つてやらア、僕ア強いぞ、おざいさんのやうな田舍ッぺえでは無いぞ、江戶ッ兒だぞ、松田の淸公なぞいつでも足がけでヒョイと轉がしてやるのだ、學校でも一年級の乙組では僕が一番强いのだ。サア來い、よう來ないのか、弱蟲だナア、そんな弱蟲は天麩羅にして食つてしまべ。ぐづ〳〵してゐると胴骨をへし折るぞ、まけたら雪隱にでもかゞんで居ろ、などゝ際限も無く惡口を利いて、仕舞には布團の上に立ちはだかつて小さいお尻をまくり出してポン〳〵叩いたりなんかしてゐるのでせう。あんまりだから叱らうとしますと、お父樣はほつて置けとおつしやつて、まだまけてゐらつしやらずに相手にしてゐらつしやいますのですよ。もし御病氣に障つたら惡うございますから、あなたいらしつて勝雄を叱つてやつて下さいましなといふ。

病室に行つて見ると父は勝雄の方を背中にして寢て居る。母は手拭で頭を冷やして居る。お父さん如何ですといふと、到頭勝雄に敗けた、少しのぼせたやうだ、といふ。見るといら〳〵と額の血管が努張して居る。本當に勝雄の活潑なのには驚いてしまふ、さつきからおぢいさんを相手にしてそれは〳〵いろんな藝當をやつたのよ、と母は笑ふ。勝雄は自分の寢床の上に坐つたまゝぢろぢろと余の顏を見て妙な眼つきをして余の氣色を覗つて居る。一寸でも隙があつたら又余を相手にせうと考へてゐるらしい。余は眞面目な顏をしてぢつと睨めて居る。何だい〳〵と小さい聲をして戰をいどむのをかまはずに抛つて置く。其內ごそ〳〵と自分の枕をかゝへて立上つたと思ふと、つまらねえナア、

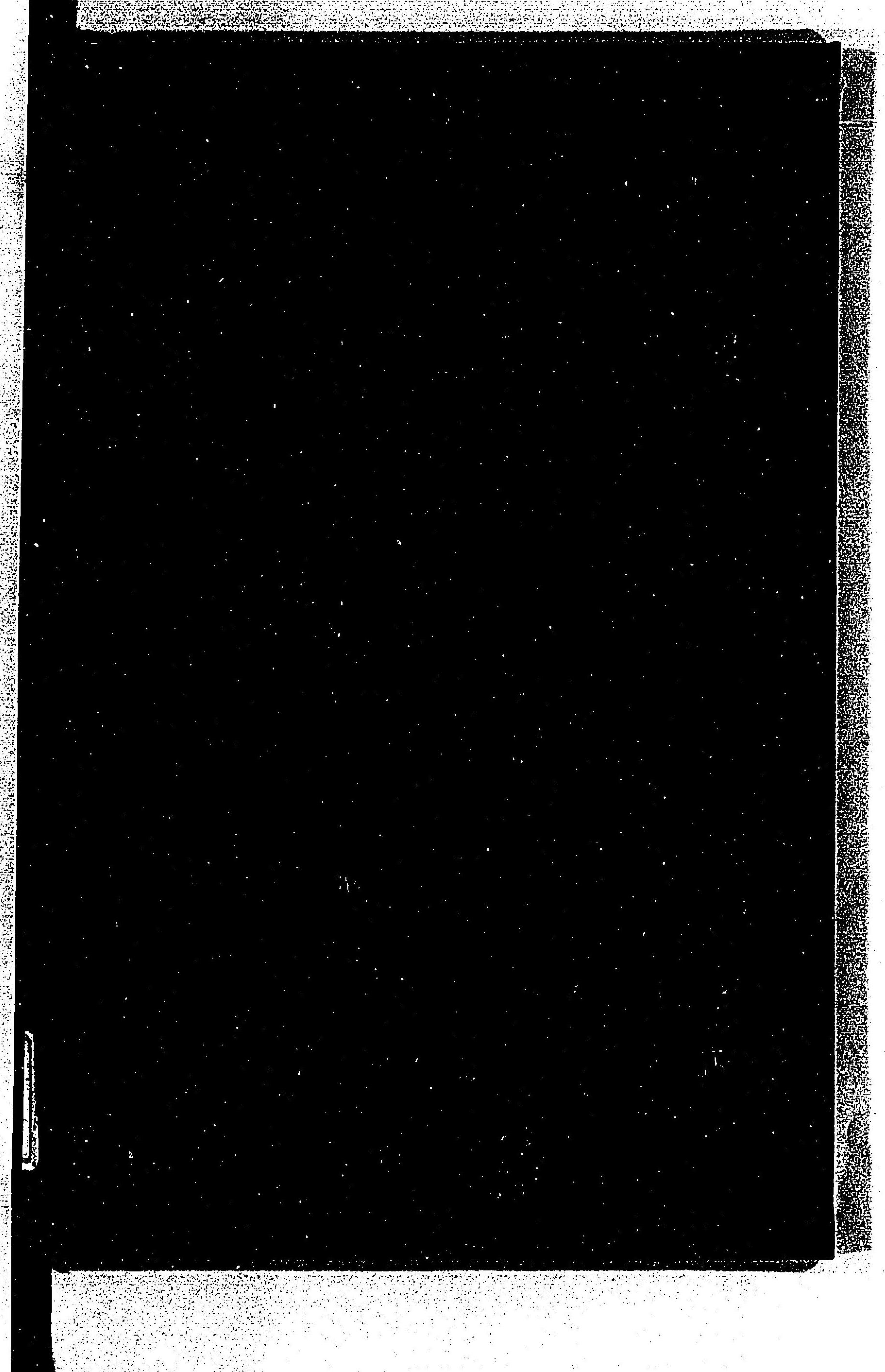
こんな老ぼれのところに誰が寢るものか、いやなこつたと緣側傳ひにすた〳〵と奥へ歸りかける。お父さん如何ですひどくおのぼせなすつたやうなら氷で冷やしませうか、と聞くと、ウンさうして貰はうか、と大分苦しさうだ。秋の日の暮れやすくもう病床のあたりはいつの間にか薄暗くなつてゐたが、よく見ると靜かに目を眠つて肩のあたりで苦しさうな息をして居る。大きな足音をして緣側を踏みならして居つた勝雄は、ふとたてかけた竿のさきに蜻蛉のとまつてゐるのが眼にとまつて、枕をかゝへたまゝ熱心に其を見て居る。笑みかたまけて其を見詰めて居る顏は軒淺く明るい夕日にくつきりと白く見えて居る。

鷄頭　終

明治四十年十二月二十九日印刷（鷄頭）
明治四十一年一月一日發行　實價金七拾錢

著作者　高濱清
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田靜子
印刷者　東京市本所區番場町四番地　廣瀬鐘太郎
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
印刷所　東京市本所區番場町四番地　内外印刷株式會社

파3K-55



26
441

093574-000-1

26-441

鶏頭

高浜　虚子／著

M41

DBQ-0962